明石のコミュニティ・スクール
未来にむけて 学びをかえる
未来を創り 社会を支える 新たな学びと育ちのシステムづくり

Twitter
YouTube

KomiKomiSukuSuku

For The Future
No.203
2023
3.1

明石市教育委員会事務局学校教育課　mail：gakkyo@city.akashi.lg.jp

「兵庫教育大学　ボランティアステーション　ネットワーク交流会」が開催されました
“ボランティアって万華鏡”～今の自分と未来の姿～

2月21日（火）に兵庫教育大学で令和4年度兵庫教育大学ボランティアステーションのネットワーク交流会が開催されました。3年ぶりの開催ということですが、学生さんが約20名、27関係機関から28名の方が参加され、初参加の私にとっても刺激を頂ける場でした。

交流会では、4名の学生さんから次のようなテーマで、体験発表がありました。

① 「自己成長としてのボランティア活動」
② 「フリースクールの支援とボランティア活動を通して学んだこと」
③ 「私の考えるボランティア感」
④ 「ココロをつなぐ、みらいへはこぶ～ボラステ発“縁”列車」

発表ごとにそれぞれの発表の中でそれぞれの感想や共有したいことなど、8つのグループでの対話がおこなわれましたが、どのテーマでの対話もそれぞれのグループで盛り上がっていました。他市町の子ども支援・生涯学習に関わる行政機関だけでなく、フリースクール等民間の子ども支援の機関の方と対話ができたのはすごく新鮮でした。特に、私自身、不登校の子どもへ関わることを通して、自分自身の視野が広がり、自分の子どもを見る考え方が変わったという「フリースクールの支援とボランティア活動を通して学んだこと」の体験発表を聞いた後に、実際にフリースクールの方と対話ができたのは貴重な体験であり、改めて学校を開いていくとはどういったことなのかを考える機会になりました。発表者の「授業では学べないことがある」という言葉を聞き、こうした実感を、2回生の段階で感じたことは、これからの自分自身の学びを広げていくんだろうなと感じました。学生さんの体験発表を聞きながら、進路選択として教師を目指し、教育大学で学び、教員として現場に出ていく学生さんにとって、学校という世界だけでなく、学校以外の場をどれだけ見て、どれだけ多様な人とつながっていけるかが、大きな財産になるんだろうなと感じました。また、先日朝霧小での“わくわく あさぎり ラボラトリー”で公開熟議（ラボ）ろうでの対話も学校・世代を超えての対話ですごくいい時間でしたが、今回は、いろいろな立場の人と立場を超えて、子どもたちの成長をテーマに対話がき、対話の面白さ、価値を実感することができました。こうした対話から、それぞれの立場を超えた新しい連携・協働できる仕組が生ま

れてくるのではと感じました。いい対話ができ、とてもいい時間を過ごすことができました。ボランティアステーションの学生さん、参加者のみなさんありがとうございました。“みんなでラボろう”でもこんな対話ができたらいいなと、モチベーションが高まりました。

教師自身が探究を　～校内から学校間交流へ～
林小学校と松が丘小学校が研究交流

　2月27日(月)に林小学校と松が丘小学校が、オンラインで研究の交流を行いました。地域とつながりながら、“地域がらみの学習”から“地域ぐるみの学習”へと、子どもの学びをデザインしようとしている林小学校が、“「ありがとう」でつながる学校・地域”を研究テーマに地域の中での子どもたちの学びを実践している松が丘小学校に声をかけ、今回の交流が実現しました。

　校内研究の進め方が、これまでなら講師の先生から指導を受けながら研究を進めていくといった“享受型パターン”から、対話をすすめながら自分たちで、道を切り拓いていこうとする、教師自身の“探究型パターン”がこれからは必要になってくるのではと感じました。

　交流会は両校の研究推進担当からそれぞれの研究の大まかな説明のあと、各学年・特別支援学級にわかれての交流が行われました。林小学校と松が丘小学校が、それぞれの取組を報告し合い、熱い対話がすすめられました。

　先生たちは、自分たちの取組をプレゼンすることで、改めて自分たちの取組を振り返ることができ、学校が目指す方向性や、自分たちの成果や課題などを改めて確認することができたのではと思います。そして何よりも“自分たちの取組を聞いてもらえた”ということが各自の自信につながったのではと思います。

　交流を終えてのまとめの会での両校の先生からの感想から、交流したことで、校区には特徴があり、相手の校区の特徴だけでなく、改めて自分たちの校区の特徴を見直すことができたことが共通していたのではと思います。特に今回林小学校の先生たちが松が丘小学校の取組に触れる中で、

“どの学年も「地域」を意識していること”

“6年間の姿が教師も子どもも分かっている”

“特に5年生は、自分が今からどんな風になっていけばよいか目の前にモデルがある”といったことに驚かれたようです。

　そして地域学習に関することだけでなく、タブレットの活用の工夫なども交流されていたようで、こうした交流の中で互いに刺激をうけるの交流のメリットと感じました。交流をとおして、教師自身が対話の中で学びを深めていく“探究型パターン”へ意識がシフトしていると感じました。

　これからは、オンライン上での日常的な研究の交流が普通になってくるのではと思います。

　そして何よりも地域学習をすることが目的ではなく、なぜ、地域の中での学び・社会とつながった学びが必要なのかを、時々立ち止まって確認していくことが必要だと感じました。そんな時にこんな学校を超えた交流が効いてくるのだと思います。　　（文責：北本）